



### 「家庭の力を信じて」

私はこの仕事に就くことを父に報告したときの父の顔が忘れられません。果たして喜んでいるのか、それとも複雑なのか、それはとても不思議な面持ちでした。父は口数が少なく、職人気質の人でした。高度成長期の時代、電気技師として家族のために懸命に働いてくれました。振り返ると、そんな父との関係は、幼少期・青年期・現在と微妙に変化してきました。構ってほしいとき、避けていたとき、できるだけ寄り添おうと思うときと、小さな歴史を積み重ねてきました。

自分自身が親となり、父のあの不思議な面持ちの意味が今となって何となく分かるような気がします。親として、ついつい自分の生き方と重ねてしまいそうなきときがあります。「こうしたらいいのに。」「それは止めとき。」など、余計な一言を言ってしまいます。また、有りもしない悩みの種を数えては過ごすこともあります。尽きない悩みと向かい合うのが親なのかもしれません。でも結局は、子供は親の知らない世界の中でいろいろな術を着実に身に付けていき、人となっていきます。家庭で見せる顔と学校で見せる顔、集団で見せる顔と一人でのときの顔。子供は様々な空間

での感情と向き合い、思考を繰り返しています。きっと親が思い描いたことと違うベクトルへと向かっていくものなのでしょう。私はこの詩を読み返す度に、はっとさせられます。私たち親が家庭でできることについて大いに悩みながら過ごす毎日です。

複雑さが増していく現代社会。取り巻く課題がたくさんありますが、だからこそ、子供たちを見守る大人が子供を育てる楽しさと困難さを共に熱く語っていただけたいと思います。家庭ができることはまだまだあり、可能性が満ち合っていると私は信じています。教頭 小笠原 裕

「子は親の鏡」 ドロシー・ロー ノルト著より

けなされて育つと、子どもは、人をけなすようになる

とげとげした家庭で育つと、子どもは、乱暴になる

不安な気持ちで育てると、子どもも不安になる

「かわいそうな子だ」と言って育てると、子どもは、みじめな気持ちになる

子どもを馬鹿にすると、引っ込みじあんな子になる

親が他人を羨んでばかりいると、子どもも人を羨むようになる

叱りつけてばかりいると、子どもは「自分は悪い子なんだ」と思うしまう

励ましてあげれば、子どもは、自信を持つようになる

広い心で接すれば、キレる子にはならない

誉めてあげれば、子どもは、明るい子に育つ

愛してあげれば、子どもは、人を愛することを学ぶ

認めてあげれば、子どもは、自分が好きになる

見つめてあげれば、子どもは、頑張り屋になる

分かち合うことを教えれば、子どもは、思いやりを学ぶ

親が正直であれば、子どもは、正直であることの大切さを知る

子どもに公平であれば、子どもは、正義感のある子に育つ

やさしく、思いやりをもって育てれば、子どもは、やさしい子に育つ

守ってあげれば、子どもは、強い子に育つ

和気あいあいとした家庭で育てば、

子どもは、この世の中はいいところだと思えるようになる

